（第２号様式）（用紙日本工業規格Ａ３横長型）

神奈川県教育委員会教育長　殿

提出日：令和　６年　３月２１日

学校名：県立横浜ひなたやま支援学校

令和５年度　学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	４年間の目標（令和２年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価（２月 27 日実施）	総合評価（３月８日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①生徒一人ひとりが自立と社会参加に向けた学習内容や指導方法の充実を図る。 ②成人年齢や選挙権年齢の引き下げに対応した教育を実施する。	①主体的、対話的で深い学びの実践や、３年間の系統立てた授業計画の評価を行い、授業改善につなげる。 ②成人年齢、選挙権引き下げに伴い、主体的・対話的で深い学びの授業を定着していく。また、指導の共有化を図る。	①授業参観や、授業公開を行い、授業改善に活かす。また、指導案や年間指導計画の書式を変更し、評価を活用できる仕組みを作る。 ②消費者教育、主権者教育、人権教育の充実を図りながら、社会の中での自分の役割を気付かせていく。指導案や教材の蓄積、共有化を図る。	①授業参観等で得られた意見や感想を、授業改善に活かせたか。また、指導案や年間指導計画の評価を活かした授業を計画できたか。 ②「シチズンシップ教育（指導用参考資料）」等を活用し、新学習指導要領に即した授業展開ができたか。また、「授業の宝箱」内の整理、教科会等を活用して共有化ができたか。	①授業参観を各学年年２回設定し、保護者からの意見を生かした授業改善ができ、学校アンケートでも一定の評価を頂いた。年間指導計画の書式に R6 年度より評価の項目を取り入れる。 ②授業担当者へのアンケートや教材等から、学習指導要領を意識して「消費者教育」「環境問題」「政治参加教育」「人権教育」の授業展開ができた。	①年間指導計画や指導案の評価を生かした授業計画を取り組むまでには至らなかったが、年間指導計画の評価を学習評価に活かし、引き続き授業改善に繋げる。 ②シチズンシップ教育は複数の授業、または教科横断的に扱っていく必要がある。教科会等を利用して指導内容の連続性の検討をしたい。あわせて「授業の宝箱」内にある教材の資料整理を行っていく。	【ｱﾝｹｰﾄ】とても良い、だいたい良いの合計） **保護者 84.0%(2.1↘)** **生徒 81.7%(0.7↘)** ＊（　）は前年比 ・じっくりと作業等に取り組めるようになり、1 つのものを作り上げた達成感、最後までやり通せた自信を、子供自身が感じられていた。 ・コロナもあって一年生の時にはなかなか生徒たちの様子を見る機会がなかったが、今年度は授業参観や作業（校内実習）見学もあり、様子を知ることができた。	①感染症対策を施しながらの授業参観であったため、廊下からの授業参観となったが、参観後にアンケートを取り、2学期以降の授業改善に生かすことができた。授業参観をしていない保護者の意見聴取方法に課題が残る。 ②シチズンシップ教育の一環として、主権者教育を意識した形式で生徒会役員選出選挙を行った。実際に使用される投票箱や投票ブースを選挙事務所から借り受け使用することで、将来の投票による政治参加を意識させることができた。	①授業改善につながる学習指導案の検討を計画的に実施する。また、保護者や学校運営協議会委員の方々に授業公開することで、客観的な評価をいただき、教職員個々の授業改善につなげ、指導力を向上させる。 ②プリント学習や調べ学習の他に、より主体的、対話的に学べる選挙体験学習や模擬投票等の学習を積み重ねることで、社会参画の意識を持ち、自立に向けた実践力を身につける授業を行う。
2	生徒指導・ 支援	①生徒の個々の実態を的確に把握し、生きる力となるような指導や支援を行う。 ②社会生活に必要な、他者との協調・思いやり、規範・モラルの意識を育む指導を充実させる。	①生徒一人ひとりの実態や発達段階を把握し、集団や個別での授業に活かす。 ②生徒同士のコミュニケーション力の向上を目指し、他者理解や協調性を養う。	①個別教育計画の新書式の活用と、次年度に向けた書式の検討を行う。アセスメントで把握した実態や発達段階を授業に活かす。 ②体験型、グループワークの活用、行事等での縦割りの活動を実施し、生徒同士のコミュニケーション力を養う。また、実習や校外学習等を通して社会のルールを学ぶ。	①個別教育計画の新書式の活用や次年度の書式について様々な意見を取り入れ見直しできたか。また、アセスメントで把握した実態等を授業に活かせたか。 ②グループワークや縦割りの活動を設定し、生徒同士のコミュニケーション力を養うことができたか。また、実習や校外学習等で、社会のルールを学ぶ場面を設定できたか。	①新書式は、承認を受け来年度の新１年より実施となった。現在、より具体的な書き方を提示するための仮の生徒像で試作を作成中である。 ②New Yokohina Week では、新しい取り組みとして３年生が１年生に模擬店運営における様子や課題を伝え質問しあうことで生徒のコミュニケーション力の向上や他者理解、協調性を養うことができた。	①4月に試作を提示し、作成のための説明会を丁寧に行っていく。 ②校内だけでなく、自分の思いを的確に表出できる力の向上や社会生活において他者・社会との適切な関りを引き続き目指す。	【ｱﾝｹｰﾄ】とても良い、だいたい良いの合計） **保護者 83.2%(2.0↗)** **生徒 68.2%(2.4↘)** ・コミュニケーションを高める訓練、自信をつけさせる体験、友達との交流や学校生活の思い出作りなど、様々な体験ができる授業計画が必要である。 ・基本的なこと(あいさつ、マナー、ルール、社会性)などが身につくように、繰り返し指導をしていくとよい。	①新書式の個別教育計画を作成・活用するために、変更箇所や記入時の注意するポイントなど、わかりやすいマニュアルを作成した。職員全体が活用できるよう、どのように周知していくか検討が必要。 ②模擬店運営において、上級生が下級生に指導し、互いにしっかりとコミュニケーションをとる場面が見られた。	①全職員が新書式の記入内容を把握できるように、職員個人に任せずチームで組織的に対応する。生徒の実態把握を正確に行い、年度末には、書式の見直しを行いブラッシュアップしていく。 ②クラス内、他学年、地域の高校生とのコミュニケーション力の向上をめざし、授業において、生徒同士がコミュケーションを図れる活動を意図的に設定する。
3	進路指導・ 支援	①生徒が納得できる進路選択を実現できるように、生徒の実態と思いを反映した指導、支援を行う。	①-1 生徒自身が課題を意識できる教科等横断的な取組を検討し、３年間を通じた系統的な進路学習を進める。 ①-2 家庭と学校の連携を深め、保護者のニーズを的確に捉える。ホームページの活用な	①-1 就労準備性ピラミッドを活用した職員対象の研修等を複数回実施し、３年間の見通しをもった進路指導の充実に繋げる。教科会や作業ユニット会等を通じて、生徒自身が課題を意識できる教科等横断的な取組を検討する。 ①-2 アンケートの実施や面談等により、保護者のニーズの把握に努める。保護者対象進路	①-1 生徒の実態に応じた課題を見極め、生徒自身が課題を意識できる教科等横断的な取組を検討・実践することができたか。 ①-2 保護者のニーズを把握し、必要な情報をわかりやすく提供をすることができたか。情	①-1「積極的にあいさつすること」を課題として学部全体で取り組んだ。中でもポスターや給食時の校内放送での生徒会役員による呼びかけは、生徒たちが課題として意識し、あいさつに取り組むきっかけとなった。 ①-2 よこひな通信や校内掲示板等を活用し、保護者向けに情報を発信した。また、体験会や	①-1「あいさつ」について、在学中に身につけた力の一つとして継続していく必要がある。また、本校の進路学習内容一覧を基に、3年間の進路指導についての整理を進め、より一層教科等横断的な取組につながるようにする。 ①-2 進路見学会の行先の精選や校内掲示板のさらなる整理等を行い、保護者のニーズに応じた情報提供を行う。進路	【ｱﾝｹｰﾄ】とても良い、だいたい良いの合計） **保護者 88.0%(2.4↗)** **生徒 76.8%(2.6↗)** ・進路選択に向けて学校単位での見学、特に個人では行けない企業の見学（特例子会社など）があるとよい。 ・進路＝社会活動（就労）について、生徒に作業で体験させつつ、より就労を意識できるような授業をお願いしたい。ま	①就労準備性ピラミッドを活用し、身に付けておきたい力を提示する中で、特にあいさつに主眼を置いた指導を様々な授業の中で行い、生徒たちにあいさつの大切さを考えさせることができた。今後は就労に大切な体力や集中力を養うためにも教科間での協力が必要である。 ②前年度より進路関係の見学会や研修会が	①現場実習から見えてきた課題や就労準備性ピラミッドを活用し、あいさつからコミュニケーションが始まる大切さを、生徒自身が意識して実践していけるよう進路担当、担任、保護者が情報を共有していく。 ②個別面談での進路希望の情報を、担任、進路担当者で密に連絡を取り、将来の進路希望に沿った進路見

	視点	４年間の目標 （令和２年度策定）	１年間の目標	取　組　の　内　容		校　内　評　価		学校関係者評価	総合評価（３月８日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等	（２月 27 日実施）	成果と課題	改善方策等
			ど、よりわかりやすくタイムリーな情報を発信する場を整える。	研修会を開催する。ホームページや通信、校内掲示等、情報を視覚的に提供する。	報発信の場を広げることができたか。	見学会等の案内を迅速に行い、保護者へ最新の情報を提供できるよう努めた。	研修会や面談等を通じて、家庭と協力しながら、在学中に身につけておきたい力を育てる。	た、就労だけではない進学又は生活支援もある等の指導があるとよい。	増えたと評価していただいた半面、見学先が生徒・保護者のニーズに合ってない場所もあるという意見を頂いた。	学会を設定するように心がけ、保護者のニーズに応えるようにしていく。
4	地域等との協働	①地域と連携し、教育活動や防災体制の充実を図る。 ②センター的機能を発揮し、地域の支援教育の推進を図る。	①-1 より地域と連携し、自己肯定感を高められる授業を全職員で検討し、展開していく。また、地域と連携した様々な活動の様子を広く発信していく。 ①-2 地域と連携した防災教育のさらなる充実や職員研修等を通した防災体制の強化を図る。また、活動の内容を積極的に発信する。 ②センター的機能について近隣高校を含めた地域に広く発信していく。また、近隣学校等のニーズに応じた支援策を提供できるよう、校内職員の連携を強化する。	①-1 情報共有や検討の場としての作業ユニット会を充実させる。地域と連携した活動を展開していくための仕組みづくりを行う。また、よこひな通信やホームページ等を活用し、活動の様子を発信する。 ①-2 地域防災拠点や消防署と連携した防災教育、職員研修会を計画・実施する。また、活動の内容が家庭にも伝わるようよこひな通信やホームページ等を通して積極的に発信する。 ②センター的機能に関する校内職員向けの研修会の実施等を通じて、センター的機能と役割についての理解を深める。人的資源や教材等の校内資源の掘り起こしを行う。	①-1 生徒の自己肯定感を高められるよう、様々な視点から活動内容や授業展開等を検討することができたか。よこひな通信やホームページ等のツールを活用した情報発信をすることできたか。 ①-2 地域や消防署と連携した防災教育や職員研修について計画・実施することが出来たか。また、活動の内容を定期的に発信することができたか。 ②センター的機能と役割についての校内職員の理解を深めることができたか。校内資源を生かした情報発信の場の設定や支援策の検討や提供ができたか。	①-1 作業ユニット会や校内研究を通じて、生徒の課題や授業の様子等を共有した。作業環境を含む支援の方策について検討し、実践につなげることができた。よこひな通信を活用し、各作業ユニットでの活動を通して地域の中で活躍する様子を発信した。 ①-2 消防署と連携した防災教育や職員研修を実施できた。アンケートでは、防災訓練を通じて防災意識が高まったという保護者74.7%(15%↗)、生徒82.2%(3.9↗)であった。積極的な発信により、学校での活動の様子を知ってもらうことができた。 ②センター的機能や役割について、校内職員への説明の場を設けたほか、校内支援の充実を目指した「よこひな人材バンク」を立ち上げることができた。ホームページ内に「よこひなの宝箱」を新設し、授業づくりや支援のヒントを紹介する等、校内外向け情報発信をスタートさせた。	①-1 作業学習以外の場面においても様々な形で学校と地域が連携し、生徒の自己肯定感や自己有用を高められるような仕組みづくりを検討していく。 ①-2 いつもとは違うシチュエーションでの訓練を行ったことにより、様々な課題が見つかった。消防署の方のアドバイスを取り入れながら、校内の防災体制を見直している。また、地域防災拠点と連携した防災教育が実施できなかったので、次年度実施できるよう、計画していく。引き続き積極的な発信を行う。 ②「よこひな人材バンク」や「よこひなの宝箱」の充実や活用を推進する。センター的機能としての役割をさらに発揮できるよう、近隣学校等と連携に努める。	【ｱﾝｹｰﾄ】とても良い、だいたい良いの合計) **保護者 59.7%(11.4↗)** **生徒 82.2%(3.9↗)** ・やりたかったユニットが、例えばフードでパン作りをしてみたかったなど、本人に選択できない点は残念だった。なるべくいろいろなことを経験できるカリキュラムを作って欲しい。 ・学生生活がここで終わる中、さらに積極的にできること、「やってみよう」「やってみたい」と思えるような支援、授業方法がまだまだあったのではないかと思う。これからはコロナ渦から脱却して、もっと自由な発想で前向きに生徒へ支援ができるような体制づくりが必要。	①-1 今年度は近隣地域の老人ホームにおける清掃活動や、農家の収穫作業補助、下瀬谷地区のケアセンターでのパン販売など、地域との交流を図った。作業や販売をすることで感謝され、自己肯定感の獲得が促された。 ①-2 今まで実施したことがない時間帯や、地震後の火災など、様々な場面を想定した避難訓練を実施した。生徒・保護者からは、消防署と連携した防災訓練に高い評価を頂いた。今後は地域との共助や、保護者も参加できる形式での訓練のあり方を検証する必要がある。 ②本校のセンター的機能を周辺地域の学校に周知し、相談業務、研修会講師など精力的に実施することができた。 ◆教育相談ケース数88回(校内:84回、校外:4回) ◆巡回相談数15回(横浜市:５回、大和市:10回)	①-1 地域との交流を図れるように計画をしていく。コミュニケーション能力や自己肯定感を上げるために、様々な場面で生徒一人一人が自分は役に立っていると思える経験を積ませていく。 ①-2 実際的なシナリオでの訓練等も行い、有事の際に生徒が動揺しないよう経験を積ませる。 　訓練等の様子を、ホームページ等を活用して、校内外に発信していく。 　保護者や地域防災拠点運営委員会、自治会の方々ともより密に連携し、防災教育のさらなる充実を図る。 ②近隣地区の福祉施設や公共機関と顔の見える関係作りを行い、センター的機能にさらなる幅を持たせ、様々なニーズに対応できるようにしていく。 　ホームページや地域ブロック内の様々な会議を利用して、広く発信していく。
5	学校管理 学校運営	①安全な環境を整備し、生徒が安心して学ぶことができる学校づくりを推進する。 ②教職員が生徒と向き合う時間を確保し、効果的な教育活動を実現する。	①社会の流れ等を踏まえて、教職員の人権意識等を高めるための取組を継続し、信頼される学校づくりを推進する。 ②生徒と向き合う時間の確保に向け、業務改善と事故防止の観点から、物的・人的資源を活用し、適正な業務の管理や効率化を図る。	①学校の課題やニーズ、社会情勢の変化を見極めて研修会を設定する。参加者に対して、研修の目的や研修後の変容等を明確にするために、アンケートを実施する。 ②事故防止に向けた仕組み作りや環境整備に努める。業務アシスタント、業務サポーター、ICT サポーターの効果的な活用を促進する。	①研修後のアンケートで、回収率および研修目的達成の回答が８割以上であったか。また、研修後の気づきを明確にすることができたか。 ②事故防止に向けた仕組みや環境整備により、教職員の意識が高まったか。業務アシスタント等を活用した業務依頼件数が増加したか。	①「人権」「生徒指導」「思春期の心」に即した研修会を設定できた。アンケートでは多角的な感想が多く見られた。また、上記の職員校内研修をよこひな通信に掲載し、保護者に対して周知した。 ②不祥事防止会議を、各グループで担当し、当事者意識を持った研修会にすることができた。昨年度より３回多く実施した。 　教室等のガラスを透明なものに変え、死角をなくすようにした。 　業務アシスタントの依頼件数は昨年度と同等であったが、会計処理や物品管理、粗大ごみの整理など多岐にわたる業務を行った。	①アンケートの回収率が 70%の研修会が１つあった。次年度も 80%以上の回収率目指し、研修会後には朝会等を利用して、職員全体にアンケート回答を呼び掛けていく。 ②それぞれに割り振った研修テーマの担当グループを替え、内容等についても変更して、形骸化しないように努める。 　業務アシスタントや業務サポーターに割り振る仕事内容を検討し、教員の働き方改革につながる業務の洗い出し等を行う必要がある。	【ｱﾝｹｰﾄ】とても良い、だいたい良いの合計) **保護者 72.4%(5.9↘)** ・様々な分野の研修を行って、特別支援学校の教員としての専門性を高めてもらいたい。 ・毎日、学校に行くのを楽しみにしている。さらに、安心安全に学校生活が送れるように、学校施設の改善や、生徒同士の問題が起きないよう、いろいろ配慮をお願いしたい。	①今年度の研修として「虐待を知る」「思春期の心」をテーマに職員研修を行った。生徒の人権を守るための研修として学びを深めることができた。教員としての専門性を高めるために、様々なテーマで研修を行う必要がある。 ②不祥事防止のための環境整備として、教室等のガラスの透明化を行った。今後教室使用のルールや、人目につかない死角となる時間や場所がないように意識していく必要がある。	①教職員の専門性、人権意識をさらに高めるため、時勢に合った研修会のテーマ、講師選定を行う。 　研修会の内容や研修の効果等、よこひな通信やホームページを活用して、外部に向けてこまめに発信していく。 ②事故防止に向けて、危険や不安と感じるところを気軽に話題にできる風通しの良い職場環境を作る。 　生徒と関わる時間を増やす、教員の働き方を整理するためにも業務アシスタントを積極的に活用する。